

地震研究所「国際地震・火山研究推進室」と共に

渡邊トキエ^{*†}

Along with “International Research Promotion Office” —A Collection of Note—

Tokie WATANABE^{*†}

はじめに

平成6年(1994年)6月, 地震研究所は東京大学付置の全国共同利用研究所に改組され, それに伴い私はあらたに技術部情報処理室員という立場になって地球流動破壊部門に配属された。以後11年間, 同じフロアの地球ダイナミクス部門との2部門の先生方の研究事務処理を担当する一方, 技術職員として「技術研究報告」の創刊や編集, 空中写真や地質図など地質資料の管理, 貸出業務に関わってきた。

「国際地震・火山研究室」(以下, 国際室)の話が私にあったのは平成17年(2005年)1月のことである。室を創りたいので協力して欲しい, とのある日突然の加藤照之教授からのお話であった。外国人と実務について英語でやりとりを交わせるほどの能力もキャリアも持たず, 招聘について何も知らない。そのような身でこの重責が務まるかどうか不安で, 数週間というものととても悩んだ。やがてあえてそのお話を受けることにしたのは, 加藤教授の地震研国際化に対する熱意と, その時ちょっとばかり頭をもたげた身のほど知らずの私のチャレンジ心からである。

2012年3月に私は退職する。創設以来6年半が過ぎ, 地震研国際室の活動を広く多くの人に知っていただき, その足跡を記録に残しておきたいと考えつつも日々追われて, なかなか静かに原稿に向かう時間がとれずにいた。そこに3月11日, 東北地方太平洋沖地震が発生した。今年度採択された15名の外国人客員ほぼ全員がとくに放射能を恐れてか訪日をためらい, 私に多少の時間的余裕が生まれた。そのような状況で書き始めたのがこの原稿である。

大震災から5カ月が経ち, ようやく今, 客員が来日を考

え始めた兆しがみえる。忙しくとも, 早くこれまでの活気ある国際室に戻って欲しい。そう願いながら, 公的記録には表われることのない地震研国際室の姿を私自身の業務体験をもとに感想を混じえながら語ってみたい。

「国際室」発足の経緯

平成17年(2005年)4月8日, 現在の地震研究所2号館429号室に「国際地震・火山研究推進室」“Office of International Earthquake and Volcano Research Promotion”のプレートが掲げられた(図1)。特別教育研究経費による「地震・火山に関する国際的調査研究」事業推進のため地震研が設置した通称「国際室」の器が整えられた時であった。

実際には, その一週間前の4月1日に国際室は最初の客員を迎えている。その日から, 室長と事務担当室員二人だけの朝のミーティングは始まり, 国際室に関わる所内外のほぼ全ての動向や情報が室長から伝えられ, 実務について話し合い, 以後今日まで続くこととなった。



図1. 2005年4月1日, 現2号館4階に「国際室」設立。「学内広報」No. 1312(2005.4.27発行)に掲載。

2011年8月10日受付, 2011年10月6日受理

[†] tokie@eri.u-tokyo.ac.jp

* 東京大学地震研究所技術部情報処理室。

* Technical Supporting Section for Information Processing, Technical Division, Earthquake Research Institute.

国際室は、平成 15 年（2003 年）、「アウトリーチ推進室」と共に所長直属の組織として設置された。当初のメンバーは、室長以下教授 3 名、助教授 2 名、技術職員 1 名の室員 7 名と大久保修平所長をオブザーバに加えた計 8 名である（表 1）。4 月 18 日の国際室初回会議の議題は、まず、室の規則の作成とこれからの室の運営の仕方についてであった。まるで真っ白なキャンバス地に絵を描くようにして国際室作りは始まった。

何うところによると、加藤教授が地震研の国際化を強く意識したのはとある外国での会議に出席した折のようである。「東京大学地震研究所」の知名度があまりにも低いことに衝撃を受けいつか世界に名を広めたいと願いつけてきたがようやくそのチャンスが訪れた、とのことであった。このチャンス到来の背景には、当時の小泉純一郎政権が打ち出した国策がある。平成 16 年（2004 年）4 月に開催された「地球観測サミット」において、地震・火山・津波防災の分野において日本がアジア・太平洋地域において国際貢献することが決議され、日本はこの分野においてリーダーシップを取ることを目指すことになった。さらに、「地震予知のための新たな観測研究計画（第 2 次）の推進について（建議）」や「第 7 次火山噴火予知計画について（建議）」においても予知研究推進のため国際協力的重要性がうたわれた。2005 年度から 2015 年度までの 10 年時限事業として開設された地震研国際室の基となる「特別研究経費」は、こうした研究者達の夢や努力、社会的背景のもとで獲得されたものである。

同じ平成 17 年（2005 年）4 月、東京大学はこれまでの「国際企画室」の機能を強化し大学における国際連携を強力に推進するため本部に「国際連携本部」を設置した。以降、地震研究所は自然災害科学の分野において、APRU（Association of Pacific Rim Universities：環太平洋大学協会）や AEARU（Association of East Asia Research Universities：東アジア研究型大学協会）へ加入しシンポジウムを開催したり、「東大フォーラム」企画に積極的に参加するなどして大きく貢献することになる。

国際室の事業内容

「地震・火山に関する国際的調査研究」と称した特別教育研究経費概算要求資料には、事業目的として以下のよう

- ① 地震・火山研究に関する先進諸国との連携を強化し、さらに高度な研究を推進する
- ② 得られた最新の研究成果をアジア・太平洋諸国に還元し、これら地域における地震・火山分野の次世代リーダーとなる共同研究パートナーを育成する
- ③ 以上により、東京大学地震研究所がアジア・太平

洋地域における地震・火山・津波の中核的研究機関となることを目指す

そしてこれら 3 つの事項を遂行する目的で設置された「国際室」は、具体的な活動として、

- ① 毎年欧米の一線級の研究者を客員教員・客員研究員として招聘する
- ② アジア・太平洋地域で発生する地震・火山活動など迅速な対応が求められる国際的活動にも対応できる体制を作る

を遂行することとなった。

招聘事業が軌道に乗るまで

上記に掲げた柱の内、発足 6 年余を経た現在、結果的に国際室としての最も大きな活動となっているのは外国人研究者の招聘事業である。また、留学生を対象とした専門部署や外国人研究者を招聘している学部や研究所などはあるものの、招聘を「事業」として行っているのは東大の中で唯一地震研国際室だけと思われる。事務担当者として私は多くの時間をとくに長期の招聘客員を迎え入れる準備や対応に費やし、数々の事務手続きを行ってきた。そのため、ここではやや詳しく招聘事業について述べ、感想を交えながら振り返ってみたい。

国際室では招聘事業を、日本に 3 カ月以上滞在して東大の職員となる「長期招聘」と、3 カ月未満の滞在で外国人研究員として扱われ旅費を支給される「短期招聘」との 2 種類に分けている。長期招聘客員は東京大学から「客員教授/准教授」の称号を付与される身分でもある。表 2 に、2005 年度から 2011 年度までの長期招聘客員、表 3 に短期招聘客員を示す。2011 年度については、東北地方太平洋沖地震発生のため多くが訪日の延期を希望され、本稿執筆中の現在もまだ日程を決めかねている方が多いことから、採択された方の氏名と所属機関のみ記してある。国際室発足以来 6 年間で迎えた招聘客員は延べ 106 名、後に述べる短期小規模事業で来所した外国人研究員を含めると平均して年間 20 名ほどの海外研究者を国際室は受け入れてきたことになる。

1. 長期招聘

長期招聘客員については、年一回、EOS 誌（American Geophysical Union 機関紙）などに宣伝広告を載せ、公募している（資料 1）。平均すると毎年およそ 30 件ほどの公募の中から、国際室での厳正な審査に基づいて 7～9 名を選考する。

長期招聘客員として外国人研究者を受け入れるには、宿舍や航空券の手配といった準備に加えて本人のビザ取得や東大での雇用に係る諸々の手続きが伴う。私が初めて取り組んだこの仕事はやや専門的な知識を必要とするものであった。これらのことにそれまで私が関わった経験がなく

表 1. 国際室員リスト (2005 年度-2011 年度)

年度	室長	室員	オブザーバ
平成17年度(2005年度)	加藤照之教授	中田節也教授	大久保修平所長
		栗田敬教授	
		平田直教授	
		森田裕一助教授	
		孫文科助教授	
		渡邊トキエ技術職員	
平成18年度(2006年度)	加藤照之教授	中田節也教授	大久保修平所長
		栗田敬教授	中塚数夫事務長
		平田直教授	
		森田裕一助教授	
		孫文科助教授	
		渡邊トキエ技術職員	
平成19年度(2007年度)	加藤照之教授	川勝均教授	大久保修平所長
		瀧瀬一起教授	中塚数夫事務長
		中田節也教授	坂本文子人事係長
		山下輝夫教授	根岸恒夫研究協力係長
		孫文科准教授	
		渡邊トキエ技術専門員	
平成20年度(2008年度)	加藤照之教授	川勝均教授	大久保修平所長
		瀧瀬一起教授	中塚数夫事務長
		中田節也教授	麦谷重男人事係長
		山下輝夫教授	根岸恒夫研究協力係長
		孫文科准教授	
		渡邊トキエ技術職員	
平成21年度(2009年度)	加藤照之教授	歌田久司教授	平田直所長
		瀧瀬一起教授	小川原茂樹事務長
		山下輝夫教授	麦谷重男人事係長
		佐竹健治教授	根岸恒夫研究協力係長
		上嶋誠准教授	
		渡邊トキエ技術職員	
平成22年度(2010年度)	加藤照之教授	歌田久司教授	平田直所長
		瀧瀬一起教授	小川原茂樹事務長
		山下輝夫教授	倉光知恵人事係長
		佐竹健治教授	根岸恒夫研究協力係長
		上嶋誠准教授	西村まり研究協力係長
		渡邊トキエ技術職員	
平成23年度(2011年度)	佐竹健治教授	加藤照之教授	小屋口剛博所長
		川勝均教授	小川原茂樹事務長
		中田節也教授	倉光知恵人事係長
		望月公広准教授	西村まり研究協力係長
		市村強准教授	
		大木聖子助教	
		渡邊トキエ技術職員	

表 2. 長期招聘客員 (2005 年度-2011 年度)

List of long-term visitors

Name (Honorary title)	Affiliation	Country	Visiting period	Host researcher
Research theme				

Fiscal 2005

Gamal S. EL-FIKY (Visiting Associate Professor)	Zagazig University, Associate professor	Egypt	2005.04.01–09.30	Prof. Teruyuki KATO
	Temporal change of crustal deformation in the Japanese Islands			
Toshiro TANIMOTO (Visiting Professor)	UC Santa Barbara, Professor	U.S.A.	2005.08.04–11.11	Prof. Kazuki KOKETSU
	Seismic wave field, velocity structure and tectonics in the Japanese Islands region			
Yuanza ZHOU (Visiting Associate Professor)	Graduate University of Chinese Academy of Sciences, Associate professor	China	2006.01.10–09.09	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
	Array seismological study of the uppermost layer of the lower mantle			
Daniel LAVALÉE	UC Santa Barbara, Associate Professor	U.S.A.	2006.01.23–04.22	Prof. Kazuki KOKETSU
	Complexity of the earthquake source and strong motion			
Francis ALBARÉDE (Visiting Professor)	École Normale Supérieure de Lyon, Professor	France	2006.03.15–06.15	Assoc. Prof. Shun'ichi NAKAI
	Theoretical and experimental studies on non-radiogenic isotopic variations in nature			

Fiscal 2006

Genka. V. CHRISTOVA (Visiting Associate Professor)	Bulgarian Academy of Sciences, Associate professor	Bulgaria	2006.04.01-07.31	Prof. Naoshi HIRATA
	Stress field in the area of multi-fault system of the 2004-Mid Niigata prefecture by inversion of earthquake focal mechanisms			
Jeffrey J. McGUIRE (Visiting Associate Professor)	Woods Hole Oceanographics Institution, Associate scientist	U.S.A.	2006.09.15-12.16	Assoc. Prof. Takashi IIDAKA
	Study of earthquake rupture and crustal deformation			
Matthew A. d'ALESSIO	U.S. Geological Survey, Mendenhall postdoctoral fellow	U.S.A.	2006.10.02-2007.03.31	Assoc. Prof. Naoyuki KATO
	Using continuously repeating microearthquakes of the Japanese subduction zone to understand fault friction			

Fiscal 2007

Benjamin K. HOLTZMAN	Lamont-Doherty Earth Observatory, Columbia University, Postdoctoral fellow	U.S.A.	2007.03.19–07.13	Assoc. Prof. Yasuko TAKEI
	Acoustic and rheological properties of partially molten rocks			
Jean-Pierre VILOTTE (Visiting Professor)	Institut de Physique du Globe de Paris, Professor	France	2007.04.01–07.30	Prof. Teruo YAMASHITA
	Dynamics and radiation of the seismic source			
N. Purnachandra RAO (Visiting Associate Professor)	National Geophysical Research Institute, Scientist E-II	India	2007.04.01–09.28	Prof. Kazuki KOKETSU
	Variations in the crust-mantle structure of Japanese islands through modeling of long period seismic Pnl waves			
Chien-Ping LEE	Institute of Earth Sciences, Academia Sinica, Postdoctoral Researcher	Taiwan	2007.04.01–09.28	Prof. Naoshi HIRATA
	Crustal and upper mantle structure of Taiwan			
Jean-Paul AMPUERO	Swiss Federal Institute of Technology Zürich, Assistant Professor	Switzerland	2007.10.01–2008.03.28	Research Assoc. Sinichi MIYAZAKI
	Physics of slow earthquakes and slip transients			
Xuzhang SHEN	Graduate University of Chinese Academy of Sciences, Post-doc research	China	2007.11.12–12.08 2008.02.01–06.30	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
	Study of crustal and upper mantle structure with combination of P and S receiver functions			

表 2. (つづき)

Fiscal 2008

Martha K. SAVAGE (Visiting Associate Professor)	Victoria University of Wellington, Associate Professor	New Zealand	2008.04.01-06.30	Assoc. Prof. Takao OHMINATO
	Research on stress changes associated with volcanic activities using S-wave splitting			
Weerachai SIRIPUNVARAPORN	Mahidol University, Assistant Professor	Thailand	2008.04.10-08.06	Prof. Hisashi UTADA
	Research of 3-dimensional electrical conductivity distribution in the Earth			
Rabi M. KUMAR	National Geophysical Research Institute, Scientist E-II	India	2008.04.11-10.06	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
	Depth localized anisotropy and dynamics of mantle flow beneath the Japanese islands through joint modeling of receiver functions, SKS and S particle motions			
Feiwu ZHANG	ETH Hönggerberg, Postdoctoral Fellow	Switzerland	2008.04.11-08.10	Assoc. Prof. Shun'ichi NAKAI
	Investigations on core-mantle interaction by quantum-mechanics calculation			
Danijel SCHORLEMMER	University of Southern California, Assistant Professor	U.S.A.	2008.06.01-08.25	Prof. Naoshi HIRATA
	Study of earthquake predictability			
Duojun WANG (Visiting Associate Professor)	Graduate University, Chinese Academy Sciences, Associate Professor	China	2008.07.22-2009.01.20	Prof. Hisashi UTADA
	Study of water distribution in the Earth's mantle			
Hiroo KANAMORI (Project Professor)	California Institute of Technology, Professor Emeritus	U.S.A.	2008.09.12-11.17	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
	Study of real-time monitoring of tsunami using W-phase / Nurture of young Scientists through education			
Emily K. MONTGOMERY-BROWN	Stanford University, Research Assistant	U.S.A.	2008.09.17-12.16	Prof. Teruyuki KATO
	Slow slip events and their relationship to local geology and seismicity rates			
Aleksey M. AGASHEV	Institute of Geology and Mineralogy, Siberian Branch of Russian Academy of Sciences, Senior Research Fellow	Russia	2008.11.01-2009.01.31	Assoc. Prof. Shun'ichi NAKAI
	Petrology and geochemistry of sub-continental lithospheric mantle using kimberlites			
H. F. WANG (Visiting Professor)	University of Wisconsin-Madison, Professor	U.S.A.	2009.01.08-03.31	Prof. Osamu SANO
	Rock physics and geodynamics			

Fiscal 2009

Martine J. AMALVICT	Louis Pasteur University, Associate Professor	France	2009.04.01-06.30	Assoc. Prof. Wenke SUN
	Changes in absolute gravity and multi-techniques observations at Oshima-Izu volcano			
Bruno REYNARD	Ecole Normale Supérieure de Lyon, Research Director	France	2009.04.01-06.30	Prof. Hitoshi KAWAKATSU, Assoc. Prof. Yasuko TAKEI
	Mineralogical interpretation of tomographic imaging of subduction zones			
Shi XUEMING	China University of Geosciences, Associate Professor	China	2009.04.01-07.31	Prof. Hisashi UTADA
	seafloor magnetotelluric (MT) data analysis, forward and inversion using FEM method			
Alexey V. KUVSHINOV	ETH Zürich, Senior Research Scientist	Switzerland	2009.04.13-2010.07.10	Prof. Hisashi UTADA
	Anomalous behavior of geomagnetic solar quiet daily variation in Japan and its relation to the subterranean electrical structure			
Hermann M. FRITZ	Georgia Institute of Technology, Associate Professor	Switzerland	2009.05.11-08.10	Assoc. Prof. Yoshinobu TSUJI, Research Assoc. Fukashi MAENO
	Studies on tsunamis generated by landslides and volcanic eruptions			
John G. ANDERSON	University of Nevada,	U.S.A.	2009.07.01-2010.03.31	Prof. Kazuki KOKETSU
	Earthquake ground motions and hazards			

表 2. (つづき)

George HELFFRICH	University of Bristol, Professor	United Kingdom	2009.11.16–2010.04.30	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
Earth's mantle transition zone and the surface structure of the inner core				

Fiscal 2010

Paul DAVIS (Visiting Professor)	University of California, Los Angeles, Professor	U.S.A	2010.04.01–07.31	Prof. Naoshi HIRATA
Deep earthquake physics based on a comparison of broadband seismic data sets recorded in subduction zones in Japan, Mexico, Peru				
Oleg V. PANKRATOV (Visiting Professor)	Russian Academy of Sciences, Senior Research Scientist	Russia	2010.04.26–2011.01.25	Prof. Hisashi UTADA
Processing of controlled source electromagnetic data for volcano monitoring				
Guojie MENG (Visiting Professor)	China Earthquake Administration, Professor	China	2010.06.11–09.10	Prof. Teruyuki KATO
1-Hz GPS data processing and its applications to the 12 May, 2008 Ms8.0 Wenchuan				
Thorsten W. BECKER	University of Southern California, Associate Professor	U.S.A.	2010.09.01–11.30	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
A multi-disciplinary model of the Pacific upper mantle				
Paul A. RYDELEK	Carnegie Institution of Washington, Visiting Investigator	U.S.A.	2010.11.17–2011.02.16	Prof. Kazuki KOKETSU
Deployment of internet and on-site analysis for earthquake early warning				
Kate H. CHEN	National Taiwan Normal University, Assistant	Taiwan	2010.12.01–2011.01.31	Prof. Takashi FURUMURA
Study on slab guided wave and scattering of seismic waves				
Christine M. McCARTHY	Brown University, Postdoctoral researcher	U.S.A.	2011.01.01–03.31	Assoc. Prof. Yasuko TAKEI
Experimental Study of seismic attenuation				

Fiscal 2011

Hüseyin S. KUYUK	Sakarya University, Assistant Professor	Turkey	2011.04.01–07.21	Prof. Kazuki KOKETSU
Developing next generation of ground motion attenuation model for Japan and Northeast Asia				
Viatcheslav S. SOLOMATOV (Visiting Professor)	Washington University (St. Louis), Professor	U.S.A.	2011.07.01–11.30	Prof. Satoru HONDA
Effect of grain size variations on the mantle flow and seismic anomalies in mantle beneath the subduction zones				
Murray Jessica Ruth MORALEDA	U. S. Geological Survey, Research Geophysicist	U.S.A.	2011.09.01–11.30	Research Assoc. Junichi Fukuda
An algorithm for detecting transient deformation events in GPS data				
Craig R. BINA	Northwestern University, Professor	U.S.A.	(3 months)	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
Mineralogical aspects of oceanic upper mantle				
Alessandro M. FORTE	Université de Québec à Montréal (UQAM), Professor	Canada	(4 months)	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
Time-dependent modeling of thermal structure and mantle flow under the Pacific				
Sergiy SVITLOV	Max Planck Institute for the Science of Light, Research Scientist	Germany	(6 months)	Assoc. Prof. Masato ARAYA
Improvements in a free-fall absolute gravimeter with application in geophysical observations				
Roberto CARNIEL	University of Udine, Researcher	Italy	(3 months)	Prof. Minoru TAKEO
Volcanic regimes characterization				
Pascal TARITS	Université de Bretagne Occidentale, Professor	France	(3 months)	Prof. Kazuki KOKETSU
Electrical conductivity distribution in the Earth: Global and regional approaches				
Marc M. HIRSCHMANN	University of Minnesota, Professor	U.S.A.	(3 months)	Prof. Hisashi UTADA
Collaborative research on volatile-assisted melting in the upper mantle beneath normal oceanic crust				

表 3. 短期招聘客員（2005 年度-2011 年度）

List of short-term visitors

Name	Affiliation	Country	Visiting period	Host researcher
Research theme				

Fiscal 2005

Sigurjón JÓNSSON	Institute of Geophysics, ETH Zürich, Acting Assistant Professor	Switzerland	2005.10.10-11.19	Research Assoc. Shin'ichi MIYAZAKI
Modeling of co-seismic crustal movements using InSAR and multiple geodetic data				
Zhongliang WU	State Seismological Bureau in China, Professor	China	2006.01.07-01.14	Assoc. Prof. Kazuyoshi KUDO
Strong motion seismology / Physics of earthquake generation				
Yaolin SHI	State Seismological Bureau in China, Professor	China	2006.01.08-01.21	Prof. Teruyuki KATO
Geodynamic modeling of the Tibetan Plateau				
Stephen R. TAIT	University of Paris 7, Professor/IPGP, Research Associate	France	2006.03.20-05.05	Prof. Takehiro KOYAGUCHI
Studies on fluid dynamics of magma source and volcanic eruption				
Benjamin K. HOLTZMAN	Lamont-Doherty Earth Observatory, Columbia University, Postdoctoral	U.S.A.	2006.03.28-04.26	Assoc. Prof. Yasuko TAKEI
On the fluid characteristics of partially melted rock and the characteristics of seismic waves				

Fiscal 2006

Kaj JOHNSON	Indiana University, Assistant Professor	U.S.A.	2006.04.01-04.30	Research Assoc. Shin'ichi MIYAZAKI
Rate-state inversion of GPS data for postseismic deformation				
Huy-Duong BUI	Ecole Polytechnique,	France	2006.04.02-04.04	Prof. Muneo HORI
Seminar for a new mathematical method for earthquake inversion				
Craig R. BINA	Northwestern University, Professor	U.S.A.	2006.04.16-05.20	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
Cooperative research on the thermal structure of the stagnant slab				
Stephan H. KIRBY	U.S. Geological Survey, Senior Research	U.S.A.	2006.05.07-06.03	Prof. Tetsuzo SENO
	Global tectonic implications of forearc serpentinite dehydration during and following subduction in orogenic belts		2006.10.02-10.27	
Sheng-Rong SONG	National Taiwan University, Associate Professor	Taiwan	2006.05.12-05.17	Assoc. Prof. Naoyuki KATO
Taiwan Chelungpu-fault drilling project				
Wu-Cheng CHI	Institute of Earth Sciences, Academia Sinica, Assistant Research Fellow	Taiwan	2006.05.12-05.26	Assoc. Prof. Naoyuki KATO
Earthquake source mechanics / Broadband OBS observation				
George HELFFRICH	Bristol University, Professor	United Kingdom	2006.07.30-07.31 2006.08.21-10.01	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
Cooperative research on the seismological structure of the ICB				
David BARATOUX	Observatoire Midi-Pyrénées	France	2006.08.10-09.29	Prof. Kei KURITA
Thermal survey of active volcanoes by remote sensing and material characterization				
Martin J. WOOSTER	King's College London, Professor	United Kingdom	2007.02.09-02.19	Research Assoc. Takayuki KANEKO
Satellite infrared analysis of active volcanoes				
Gareth ROBERTS	King's College London, Postdoctoral Fellow	United Kingdom	2007.02.09-02.19	Research Assoc. Takayuki KANEKO
Satellite infrared analysis of active volcanoes				

Fiscal 2007

Sophie PEYRAT	Institut de Physique du Globe de Paris, Postdoctoral Researcher	France	2007.04.16-05.20	Prof. Teruo YAMASHITA
Study of subduction zone earthquake				
Jun KORENAGA	Yale University, Assistant Professor	U.S.A.	2007.06.21-07.10	Assoc. Prof. Takashi IIDA
Thermal cracking and the ambient state of stress in oceanic lithosphere				

表 3. (つづき)

Valérie VIDAL	Ecole Normale Supérieure de Lyon, Permanent Researcher at CNRS (Centre National de la Recherche Scientifique)	France	2007.08.18–10.27	Assoc. Prof. Mie ICHIHARA
	Generation mechanism of pressure waves in the air by bubble bursting: the limit of linear wave theory and the effects of non-linear processes			
Hideo AOCHI	Bureau de Recherches Géologiques et Minières (Orléans), Project Leader	France	2007.10.17–11.01	Assoc. Prof. Takashi IIDAKA
	Study on generation mechanism of short period strong ground motion			
Pascal TARITS	University de Bretagne Occidentale, Professor	France	2007.10.21–12.20	Prof. Hisashi UTADA
	Study of electrical conductivity of lower mantle			
Qi WANG	Institute of Seismology, China Earthquake Administration, Professor	China	2007.01.14–03.19	Prof. Teruyuki KATO
	Study of active tectonics in east Asia using GPS			
Benjamin K. HOLTZMAN	Lamont–Doherty Earth Observatory, Columbia University, Postdoctoral	U.S.A.	2008.03.01–03.30	Assoc. Prof. Yasuko TAKEI
	Discussion on cooperative studies / On the flow characteristics of the partially melted			

Fiscal 2008

Jnana KAYAL	Jadavpur University (Kolkata), Emeritus Scientist	India	2008.04.28–05.24	Research Assoc. Aitaro KATO
	Seismotectonic Model of the 2001 Bhuj Earthquake Source Zone			
Michel RABINOWICZ	Université Paul Sabatier, Professor	France	2008.07.02–08.16	Prof. Kei KURITA
	Thermal evolution of partially-molten mantle / Thermal survey of active volcanoes			
Paul J. TACKLEY	Institute of Geophysics, ETH Zürich, Professor	Switzerland	2008.08.15–09.06	Prof. Satoru HONDA
	Development of spherical mantle convection models and application to subduction			
Luis A. RIVERA	Université Louis Pasteur, Professor	France	2008.09.10–11.11	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
	Cooperative research on seismology and education for graduate students			
David A. YUEN	University of Minnesota, Professor	U.S.A.	2008.10.11–11.12	Prof. Takashi FURUMURA
	Modelling and visualization of tsunami waves along East Asian coast			
Rodolfo CONSOLE	Istituto Nazionale di Geofisica e Vulcanologia, Scientific Advisor	Italy	2008.10.30–12.14	Prof. Kunihiko SHIMAZAKI, Assoc. Prof. Ken'ichiro YAMASHINA
	Advanced study on recurrence time of large earthquakes			
Alik T. ISMAIL-ZADEH	Geophysikalisches Institut, Universität Karlsruhe, Senior Research Fellow	Germany	2008.11.09–12.06	Prof. Satoru HONDA
	Quantitative modeling of geodynamic evolution of Japan and its surroundings			
Michael KENDALL	University of Bristol, Professor	United Kingdom	2008.11.12–11.22	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
	Lectures on seismic anisotropy			
Gregory BEROZA	Stanford University,	U.S.A.	2008.11.22–12.06	Prof. Kazuki KOKETSU
	Research planning for the SCEC-ERI Academic Exchange Agreements			
Hui LI	Institute of Seismology, Chinese Earthquake Administration (Wuhan), Professor	China	2009.01.12–02.20	Assoc. Prof. Wenke SUN
	Study on gravity change in the southern area of Yunnan and Tibetan Plateau			

Fiscal 2009

Jean-Paul MONTAGNER	Université Paris Diderot and Institut de Physique du Globe, Professor	France	2009.04.04–05.02	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
	Collaborative study of time-reversal source-imaging and mantle seismic anisotropy			
Maurizio RIPEPE	University of Florence, Professor	Italy	2009.05.18–06.14	Assoc. Prof. Takao OHMINATO
	Study on physical process of the infrasound excitation at active volcanoes			

表 3. (つづき)

Luis A. RIVERA	École et Observatoire des Sciences de la Terre, Professor	France	2009.05.31–07.17	Research Assoc. Hiroshi TSURUOKA
	Collaboration of W phase inversion and GRiD MT			
Javed H. N. MALIK	Indian Institute of Technology, Associate	India	2009.06.10–07.10	Prof. Kenji SATAKE
	Paleoseismology and active tectonics of Andaman Islands			
Hossein SADEGHI	Ferdowsi University of Mashhad, Assistant Professor	Iran	2009.06.10–07.10	Research Assoc. Hiroe MIYAKE, Prof. Kazuki KOKETSU
	Joint research on strong ground motion during the 2003 Bam, Iran, Earthquake			
Peter SHEARER	Scripps Institution of Oceanography, UC San Diego, Professor	U.S.A.	2009.08.26–09.17	Research Assoc. Satoko OKI
	To have lecture course for undergrad and graduate students			
Neil M. RIBE	Universite Paris SUD 11, Professor	France	2010.02.25–03.15	Prof. Kei KURITA
	Fate of subducted plate in mantle dynamics			

Fiscal 2010

Ralph J. ARCHULETA	University of California, Santa Barbara, Professor	U.S.A.	2010.03.13–04.09	Prof. Kazuki KOKETSU
	Source studies of recent large earthquakes			
Andrew JACKSON	ETH Zürich, Professor	Switzerland	2010.04.10–05.04	Assoc. Prof. Hisayoshi SHIMIZU
	Study on the deep mantle electrical conductivity using geomagnetic secular variation / Discussions on future collaborative research			
Bruno REYNARD	CNRS & École Normale Supérieure de Lyon, Research Director in CNRS	France	2010.05.15–06.19	Research Assoc. Kenji MIBE
	Follow on collaboration on electrical conductivity and seismic anisotropy in link with hydrous phase detection in subduction zones			
Changsheng JIANG	Institute of Geophysics, CEA/Research Associate	China	2010.05.21–06.20	Prof. Naoshi HIRATA
	Collaboration for the study of earthquake forecasting for Japan and China			
Matthew C. GERSTENBERGER	GNS Science, Researcher	New	2010.05.21–06.20	Prof. Naoshi HIRATA
	Collaboration for the study of real-time aftershock hazard maps			
Prakash KUMAR	National Geophysical Research Institute,	India	2010.05.31–07.16	Prof. Hitoshi KAWAKATSU
	Collaborative study of lithosphere–asthenosphere boundary			
Florian C. FUSSEIS	University of Western Australia, Associate	Australia	2010.09.04–10.03	Assoc. Prof. Yasuko TAKEI
	Real-time monitoring of melt configuration in rock analogues in 3D			
Luis A. DALGUER	Swiss Seismological Service, ETH Zürich, Researcher	Switzerland	2010.10.01–10.31	Prof. Teruo YAMASHITA
	Theoretical study on dynamic earthquake rupture on a bimaterial interface and high-frequency radiation			
Jean-Pierre VILOTTE	Institut de Physique du Globe de Paris, Professor	France	2010.10.23–11.23	Prof. Teruo YAMASHITA
	Theoretical study of dynamic earthquake rupture			
Danijel SCHORLEMMER	Southern California Earthquake Center, Research Assistant Professor	U.S.A.	2010.10.25–11.09	Prof. Naoshi HIRATA
	Global collaborative study of earthquake predictability			
Nikolay A. PALSHIN	P. P. Shirshov Institute of Oceanology, Head of Geophysical Field Laboratory	Russia	2011.01.17–03.03	Prof. Hisashi UTADA
	Northeastern Asia upper mantle electrical conductivity			

Fiscal 2011

Paul SEGALL	Stanford University, Professor	U.S.A.	(14 days)	Research Assoc. Junichi Fukuda
	A real-time method for detecting transient deformation signals in GPS time series			
Giovanni OCCHIPINTI	Institut de Physique du Globe de Paris, Assistant	France	(89 days)	Research Assoc. Shingo WATADA
	Ionospheric wave propagation from earthquakes and tsunamis			

表 3. (つづき)

Benoît TAISNE	Institut de Physique du Globe de Paris, Postdoctoral Researcher	France	(31 days)	Research Assoc. Yosuke AOKI
Physics of magma transport through analog and numerical experiments				
Bruce E. SHAW	Lamont Doherty Earth Observatory, Columbia University, Lamont Associate Research Professor	U.S.A.	(31 days)	Prof. Teruo YAMASHITA
Theoretical study on fault geometry and earthquake dynamics				
Maximilian J. WERNER	Princeton University, Harry H. Hess Postdoctoral Fellow	U.S.A.	(15 days)	Prof. Naoshi HIRATA
Earthquake seismology, seismic hazard, stochastic point processes				

事務担当が一人という体制もあって、国際室は事務部の各関係部署に協力をお願いしてこの招聘事業を行うこととした。発足後しばらくは、私は客員と研究者と事務部の間で動く仲介者のようであった。

関係部署は、雇用やビザ申請、給与などに関しては人事係、入所届などの所内手続きに関しては庶務掛、客員室の予約や東大宿舎の申請に関しては研究協力係、出張手続きについては経理係、民間宿舎の利用にあたっては契約係、客員室の鍵の授受は管理係といった具合で、客員が来日するたびに私は事務室内の全部署を動き回る。

この中でも、招聘事務にもっとも深く関わったのは人事係である。東大で雇用し、職員として接遇するにあたっては履歴をはじめとする数々の個人データと手続きが必要となり、加えて租税条約や共済組合関連の手続きが派生する。客員にメールで尋ね、ようやく得たデータを人事係に渡したと思うとまた別のデータ提出の依頼が来、という五月雨的なやり方を繰り返すうちに、私は必要データの一つにまとめたエクセルファイルを作ることにした。[info-long]と名付けたこのファイルを採択時に一度客員に送れば、客員の回答の手間も一度で済む。以後、来所前の人事関係の手続きはとても楽なものになった。

研究協力係には、東大インターナショナルロッジの申請や客員室の予約において協力いただいた。多くの場合港区の白金台ロッジに申請するが、受付可能な6カ月前に来所日程を決められる客員は少なく、室数の少ない夫婦部屋や家族用部屋の確保はとくに難題であった。申請が採択されなかった場合に備えて民間宿舎を同時手配するというややこしい作業には、この係とのスムーズな連携が欠かせなかった。また、地震研1号館と2号館の客員室の格差をなくすために全ての客員室を見て廻り、所に内装や什器の一新を要求したのもこの係の協力を得てのことであった。

給与の支払いや出張手続きに関しては経理係が担当した。地震、火山、津波という突発的な自然現象を相手とする研究者達の行動には予測しがたいものがある。また、届くメールも今日は地球の東から明日は西からといったように世界中の大学や機関を股にかけて動き回っておられる方

も多く、より便利で安価な世界一周のような航空券を求めてしまわれる。地震研が要求する証拠書類の体を成さないことが多々あり、この係に労を取らせることになった。

この長期招聘事業を進めるにあたっては、事務処理上のことだけでなく多くの場面において不便を感じたり立ち止まるが多かった。そこで、これに関しては後にさらに詳しく述べてみたい。

2. 短期招聘

多くの手続きが必要な長期招聘者とは異なり、短期招聘者を迎え入れる事務手続きは簡単である。宿舎の手配や航空券の手配は同様としても、来日の2週間ほど前までに出張申請書作成に必要な書類が提出されれば準備は整う。ただ、「旅費」支給扱いとなるため、来日後に他大学や機関の訪問を希望する場合はその計画を事前に国際室に伝えてもらい、当初の申請書に全ての行動計画が盛り込まれなくてはならない。そのためには、やはり地震研内外の関係者との十分な打ち合わせが必要とされ、来日準備には時間も要る。

国際室では慣例として、来所時には受入教員に客員を案内いただいて初対面の室長や私にご紹介いただく。また、退所時にはお茶を飲むなどしながら地震研滞在の感想を伺ったり、ある客員に“Parting Thoughts”と名付けていただいた芳名録のような小冊子に言葉を残していただいている。滞在中に行った研究の簡単なレポートは国際室のウェブサイトに登録として残され、彼らの地震研滞在時の活動内容をオープンにしている。しかし、2週間あるいは1カ月といった短期招聘者の場合は来日直後の入所手続きや旅費受け渡しの時に顔を合わせるだけで終わってしまうことも多く、残念であった。研究打ち合わせ、フィールドワークと短い日本滞在期間に招聘者の成すべき用務は多く、致し方のないことかもしれない。

以上のように、地震研国際室の招聘事業は関係する事務部署間との密な協力のもとに行われた。来所の時期について、採択された客員はまず自身の都合を基に受入教員と相談して国際室に通知してくる。国際室としては希望をそのまま受け入れる。そのため、年間を通じて滞在する客員の

資料 1. EOS 誌掲載「(長期招聘客員募集広告)」

Visiting Professor / Post-doc Position

Earthquake Research Institute, The University of Tokyo, Japan

The Earthquake Research Institute, the University of Tokyo, invites applications for Visiting Professor / Post-doctoral Fellow positions in the research fields of earthquakes, volcanoes, and physics of the earth's interior.

The period of each position will be three through twelve months during the period from April 1 to March 31 of the next year, which is Japanese fiscal year. Applications can be accepted during the designated period, generally, between May and July. Announcement of solicitation will be made through our webpage, EOS and widely used e-mail listings.

Candidates are requested to submit the following set of documents, though they are subject to change without notice:

- (1) CV with date of birth and detailed account of academic activity
- (2) List of academic publications
- (3) Summary of research that the candidate has conducted (300-500 words)
- (4) Title of research and research proposal at ERI (300-500 words)
- (5) Desired length of stay; from three to twelve months

Candidates are also requested to nominate a host researcher of ERI. If you need detailed information on host researchers, please visit our website at
<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/eng/>

The appointed candidates are expected to carry out research at ERI as an employee of the University of Tokyo. Monthly salary, ancillary expenses including partial housing costs and commuting allowance will be paid based on the rules of the University and ERI.

If you need further information regarding this position, please feel free to contact Professor Teruyuki Kato or Ms. Tokie Watanabe.

Teruyuki Kato and Tokie Watanabe
International Research Promotion Office
Earthquake Research Institute, The University of Tokyo
1-1, Yayoi 1, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0032 JAPAN
Phone: (+81) 3-5841-5818
Fax: (+81) 3-5802-8644
Email: intl-office@eri.u-tokyo.ac.jp

UNIVERSITY OF TOKYO

数が一定とはならず、長・短期さらに以下に述べる「短期小規模事業」による来訪者も合わせて10名もの手続きが重なったこともある。少なくとも2〜3名の客員は所に滞在しているのが普通である。そこへこれから来日する客員からの質問メールが相次ぐ。この対応については、必要情報を簡潔にまとめた2頁ほどの“Announcement to Visitors”という案内文を作り、事前に添付ファイルで客員に送る工夫を試みた。だが、対人間的なことは型通りの文書を配れば済むというものではないらしい。来日が具体化するとひとつひとつ問い合わせが来て、国際室はやはりその都度個別に応じることとなる。

時間と人との絡み合うこの作業に私は混乱に陥ることしばしばであった。そこで私は作業マニュアルを作り、このエクセル・ファイルシートの項目をひとつひとつチェックしながら事を進めて行った。ただ、6年という長い年月の間には東大そのものの外国人研究者の待遇方針や整えるべき書式の変更などで、マニュアルを改訂更新しては今日に至っているのが実情である。また、メールは私にとってもっとも大事なツールであった。機種交換の時には何をおいてもこのバックアップをお願いしたほどである。客員はもとより多くの関係者との時間を追ったこのやり取り記録を失っては、招聘作業は全くお手上げである。ほぼ一日中PCに向かい、国内外の誰かとメールを交換しているというのが私の日常である。

平成20年(2008年)9月、国際連携本部はこれまで東大を訪れた外国人に直接メールを送ってアンケート調査を行った。国際化推進にあたり、東大の現状をどう思っているか、どのような点を改善して欲しいか、など研究環境や事務手続き、家族に対するサービスなどいくつかの項目についてである。その時に、地震研国際室を名指しで称賛する声が多数寄せられたとの内部連絡を連携本部から受けた。このような調査も結果もまさに青天の霹靂だったが、大久保所長や受入教員の方々の努力と共に、做う所もなく暗中模索で進めてきたこれまでの国際室のやり方がある程度の成果を得たようで嬉しかった。

国際シンポジウムへの参加とブースの出展

国際室が発足した平成17年(2005年)、国際室はさっそく科学技術振興調整費「スマトラ型巨大地震・津波被害の軽減策」の事務局となり、同年12月に東京で開催予定の国際シンポジウムの準備にあたることになった。会場選びから始めて打ち合わせ会議を数多く重ね、ようやく実行にこぎつけた感があるが、私が国際会議開催のノウハウを学んだ最初の機会であった。

前述したAPRU(Association of Pacific Rim Universities: 環太平洋大学協会)は、環太平洋地域社会にとって重要な経済発展、都市化、技術移転、大気汚染、資源枯渇

などの諸問題に対し教育・環境の分野から協力・貢献することを目的として1997年に設立された組織で、シンガポール国立大学に事務局が置かれる。現在、環太平洋地域の36の大学がメンバーとなっているが、東京大学はこの組織に創立時から参加し、京都大学、大阪大学、早稲田大学、慶應大学と共に交流を行ってきた。室が発足した1〜2年は、東京大学の国際化に伴う大きな構想に基づく活動から地震研究所内の客員室の整備まで、「国際」と名のつくものの、「国際」「外国人」にまつわることを全てが持ち込まれ、国際室もまたそれらに対し使命感をもって意欲的に取り組もうとした時期であった。さらに地震研が地震・火山・津波といった地球科学分野の教育研究機関であることからアジアにおける貢献も期待され、さっそくこのAPRUにおいても東大が2年後の「第3回APRU学術会議」の主催大学として名乗りを上げるための力となった。東大主催が決定してからは、国際室は会議プログラム編成のためインドネシアのジャカルタ大学や所内の研究者と協議を重ねる一方、事務局として東大本部や地震研事務局との間に立って必要な手続きを進めた。京大が主催する京都での第1回会議、阪大とUC Berkeleyが共催するサンフランシスコでの第2回会議に数名の発表者を送ると同時に室長や私も事務方として参加し知識を蓄積するなど長い期間と入念な準備を経て、2007年6月のジャカルタでの開催にこぎつけた。東大本部から担当理事、国際連携本部長、地震研から事務長参加というセレモニー的要素も加わった大きなイベントであった(図2、3)。

この他にも、各研究分野ごとに地震研主催/共催もしくは後援の国際シンポジウムが国内外で催されているようであるが、教授会に呼びかけ国際室への積極的な通知と資料提供をお願いしているもののこちらの情報収集力の不足もあって把握できていないものが多い。

執筆中の今は、この秋にフランスのパリ、リヨンの二都市において開催予定の「東大フォーラム2011」の準備に追



図2 APRUシンポジウム(ジャカルタ)にて全体記念撮影。



図 3. APRU シンポジウム、中塚事務長を中央に事務方の記念撮影 (Hotel Nikko JAKARTA にて)

われているところである。このフォーラムは、2年前にリヨン市長を団長とする一行が東大を訪問して学術的な提携を求めたことからきたもので、その後地震研にはリヨン大学長や ENS Lyon (Ecole Normale Supérieure de Lyon) の代表者が数回訪れ、ちょうど来所中のフランス人客員を交えて具体的事業について協議を重ねてきた。このように、外国側研究者/機関、行政機関、東大の国際本部 (2010 年 4 月に「国際連携本部」から改められた)、地震研研究者/事務部の間に入り、国際室は会議をアレンジする。その準備過程においては、それぞれの立場により意図するところが食い違ったり、お国柄で準備のスピードが合わなかったりなどで会議開催まで多くの労を取るようになるのは国際会議開催に当たって付きものである。

また、招聘事業を推進する上において国際室の欠かせぬ仕事のひとつに地震研や室の宣伝活動がある。地震研については、次第にアウトリーチ室が国内だけでなく国外での広報活動も担当することになったが、その後も二室が協力し合いながら AGU (American Geophysical Union) や EGU (European Geophysical Union)、IUGG (International Union of Geodesy and Geophysics) など世界中から多くの研究者が集まる地球科学系の大きな国際会議に出かけては広報にあたる。ブースにはポスターや地震研や国際室の資料を揃え、訪問者に対応するが、大概の場合において、これから地震研に行きたいという人だけでなく過去に地震研や日本を訪れたという人の懐かしそうな訪問を受けるのが常である。客員として過去に招聘された方がブースにわざわざ足を運び会いに来て下さるのは、見知らぬ地において私がなお嬉しく感じることであった。また地震研ブースは、どの会議においてもいつも日本人の格好の溜まり場となったが、このような海外でのブース活動を行える地震研が羨ましいとの声を良く耳にした。会期中に日本で M6.5 の駿河湾地震が起きた時には、大学、機関を問わずに取得したばかりの情報をブースの余白に貼り並べて議論、



図 4. ブース光景 (ペルージャ大学での IUGG にて)

海外研究者への解説にあたったこともあった。

国際会議やブース出展についてはいろいろな思い出がある。ある会議の時には、テロリストが会場に紛れ込んだとの情報に事務方は一時戦慄した。また、国内であれば会場の様子などもおおよその見当がつき準備体制も万端整えられるのだが、海外でとなると驚きあわてたことも多い。当然屋内と思いきやそれなりの支度をして臨んだら、木立の中のテント村で2週間過ごすことになったペルージャの IUGG はとくに忘れ難い (図 4)。出勤するとまず木の葉が舞い散るブースのお掃除、宿に帰っては結局会期中着回すことになった off 用ジーンズの手洗い洗濯。後になってみると、イタリアの夏の陽光は快適で風はとてもさわやかだったし、市街を見下ろす丘の上にある会場から眺める中世紀のピンクのレンガ造りの家の修理光景はまるで絵画を見るかのように楽しかった。だが、ペルージャでのこの会議は運営のあらゆる点においてまさにハッピーニングの連続であった。

先に送っておいた資料が期日までに届いていなかったり別の場所に置いてあったり、会議前日に何度も会場に足を運ぶ破目になるのはよくあることである。釜山での AOGS (Asia Oceania Geosciences Society) 会議の時は、印刷物の大きな包みが事もあろうにホテルの冷蔵庫に保管され冷えていたこともあった。また、インドネシアでの APRU 会議の時には、帰国のためホテル手配のバスに皆で急ぎ乗り込んだもののさっぱり走り出す気配が無く、聞くと運転手が朝のお祈りを始めたという。気が抜けてしまった。パリでは突然のストライキに遭い、途中でタクシーを乗り換えながら重いスーツケースを引きずってどうにか空港にたどりついた。だが、その空港でまた、アイスランド噴火による運航時間変更で待たされる羽目となった。経験を積んでも積まなくても予測できないことに遭遇することが、外国出張では何と多かったことだろう。

協定と派遣事業

地震研究所はいくつかの大学/機関と部局間協定を締結している(表5)。その中で中国科学院研究生院(Graduate University of Chinese Academy of Sciences)には、毎年夏に国際室から2~3名の講師を派遣している(表6)。これは国際室発足時に科学院側からの要望があって始めたもので、地震や火山について世界から招かれた先端科学者と共に地震や火山について講義する。受講対象者は中国全土から選りすぐられた若い学生達で、約一週間の日程で宿泊形式で行われる。派遣した講師の報告によると、スクールはとても良くプログラミングされ、聴講する学生が大変熱心である上にオフの時間もアットホームなものである。その様子の一端を図5に紹介する。しかし、一週間というまとまった時間をこの講義のために割ける研究者は所内で容易に見つからず、国際室から指名してほしいことが多かった。このような場当たりの派遣ではなく、地震研として計画的に講義テーマを考えその分野の講師を派遣すべきという意見も国際室会議の席上出されたことがあったが、十分な議論のないまま今日に至っている。また、これに倣って地震研でもこのようなスクールを行ってはどうかとの意見が出されたことがあったが、これについてもその後議論の進展はみえていない。

短期小規模国際事業

年度当初の計画に沿って以上の事業を行い、諸々の事情から予算に剰余金が生ずることが分かると所内に公募して研究者の国際的な研究活動を支援する。これを短期小規模国際事業と称している。表7にこれまで支援した活動を挙げる。研究者自身が海外に赴く費用に充てられるだけでなく、海外から研究者を呼んで調査、研究、打ち合わせを行うにはとても簡便なシステムで、利用希望者が多いため、それぞれの配分額は高額にはならない。

国際室アラムナイ

2005年の創設以来6年間で国際室が招聘した客員は述べ106名であることはすでに述べた。2007年6月、加藤室長はこれらの客員を対象とし国際室員を含めた同窓会「ERI Alumni」を組織して関係者に通知した。

第1回同窓会は、2010年5月にオーストリアのウィーンで開かれたEGU Meetingの会期中に同会場の一スペースを借りきって開催されたが、かつて地震研に在籍したことがあり会議に出席中だった日本人研究者なども加わって当初の予想を上回る40名ほどの参加者があり、概ねの成功をおさめた。

第2回を、今年12月にサンフランシスコで開催されるAGU Meetingの折に開催する。すでに昨年末に市内の会

場を数か所巡り、室内を下見、パーティ担当者と面会して室や料理について説明を受けるなどしているが、遠隔地での開催故に準備にも何かと不便さがつきまとう。多国籍の同窓生にどのようなパーティにしたら楽しんでいただけるかを思案中で、今後の地震研の国際的交流のためにも成功を願っているところである。

国際室ホームページ

国際室は発足後間もなくホームページを立ち上げた。だが、当初に室としてこなさなければならない膨大な作業があったため、HP作成と更新にあたってはテクニックを有するサポーターを必要とした。これについてもいくつか案が上がったが、結局は学生の力を頼みとすることとし学生委員会に投げかけて希望者を募った。謝金を支払っての補助作業となったが、本来ならばこれについて室としてのしるべき体制が取られるべきであったと思う。これまで3名の院生が従事したが、後に技術部HPが改訂される際の参考とされたこのHPはことに作成時に関わった院生の技量と真面目な取り組みに負っている。

現在の国際室HPに掲載されている内容はほとんどが招聘事業に関わるものである。来所した研究者のプロフィールや研究成果、それにビザや宿舎などの実用情報を載せてこれから来日しようとする外国人だけでなく所内の多くの教職員、院生に役立つものを目指しているが手が廻らない。

親善のために

以上において国際室が行っている業務の内容を紹介してきた。次に、業務や職務とは言えないものの、国際親善のためにと加藤室長や私が取り組んできた二つの事柄について紹介してみたい。これらは、外国からの来訪者に少しでも地震研や日本での生活を楽しんでいただきたいという素朴な発想から始めたことだが、このような活動を継続させるにはやはり努力が要するというのも長い間の率直な感想である。地震研に來られた外国の方々于心よく暮らし、望むような研究成果をあげ、また地震研を訪れてみたいと思っていただくにはどのような環境作りが必要なのであろうか。ささやかな活動を通し、「業務」と「ボランティア」との狭間で考え続けたことである。

1. 国際室パーティ

客員が数名同時期に来日したのを機に、パーティを開いて全所的な歓迎を示し、同時に若い院生達の国際化教育の一助になればとの意図で考案されたのが国際室パーティである。しかし、1号館2階のラウンジを会場にケータリング料理を準備してのパーティも数回で終わってしまった。主催者側の工夫も足りなかったのだろうが、所を挙げて外国人研究者の来所を歓迎するという雰囲気を感じることができなかったのは残念に思う。教員は関係する受入教員の

表 5. 協定締結大学/機関 (2011 年 8 月 3 日現在)

機関名称		国名	協定種類	締結年月日	有効期間	有効期限
College of Earth Science, Graduate University of Chinese Academy of Sciences	中国科学院	China		2005.03.04		
Institut de Physique du Globe de Paris	パリ地球物理学研究所	France	部局間	2007.08.04	2006.04.23より5年間	2011.04.22
Southern California Earthquake Center	南カリフォルニア地震センター	U.S.A.	部局間	2006.06.01	2006.06.01より5年間	2011.05.31
University of Helsinki	ヘルシンキ大学	Finland	大学間	2006.08.15	5年間	2011.08.14
Institut Teknologi Bandung	バンドン工科大学	Indonesia	大学間	2007.03.20	5年間	2012.03.19
Institute of Geology, China Earthquake Administration	中国地震局地質研究所	China	部局間	2008.09.23	2008.06.12より5年間	2013.06.11
Woods Hole Oceanographic Institution	ウッズホール海洋研究所	U.S.A.	部局間	2010.10.07	2009.02.02より5年間	2014.02.01
V.I.Ilichev Pacific Oceanological Institute, Far Eastern Branch Russia Academy of Sciences	ロシア科学アカデミー極東支部V.I.イリイチエフ太平洋海洋研究所	Russia	部局間	2009.07.31	2009.07.31より5年間	2014.07.30
The Universite de Bretagne Occidentale	西ブルターニュ大学ヨーロッパ海洋研究所	France	部局間	2010.01.03	2010.01.03より5年間	2015.01.02
Department of International Cooperation, China Earthquake Administration	中国地震局国際合作司	China	部局間	2010.03.03	2010.03.03より5年間	2015.03.02

表 6. 中国科学院研究生院講義 派遣研究者リスト (2005 年度-2011 年度)

年度	派遣者	派遣期間
平成17年度(2005年度)	川勝均教授	2005年6月27日-7月1日
	瀬野徹三教授	2005年7月4日-7月8日
	古村孝志助教授	2005年7月4日-7月8日
平成18年度(2006年度)	山野誠助教授	2006年6月27日～6月30日
	篠原雅尚助教授	2006年7月3日～7月6日
	堀宗朗教授	2006年7月4日～7月8日
平成19年度(2007年度)	新谷昌人准教授	2007年6月18日～6月21日
	宮崎真一助教	2007年6月18日～6月22日
	宮崎真一助教	2007年6月18日～6月22日
平成20年度(2008年度)	宮武隆准教授	2008年6月30日～7月3日
	波多野恭弘助教	2008年7月1日～7月4日
	小国健二准教授	2008年7月2日～7月5日
平成21年度(2009年度)	上嶋誠准教授	2009年6月29日～7月4日
	加藤照之教授	2009年6月30日～7月4日
平成22年度(2010年度)	都司嘉宣准教授	2010年7月4日～7月8日
	本多了教授	2010年7月5日～7月9日
	望月公廣准教授	2010年7月7日～7月11日
平成23年度(2011年度)	竹内希准教授	2011年6月27日～7月2日
	青木陽介助教	2011年7月3日～7月9日

方しか参加されず、院生達は遠巻きにゲストを取り囲むだけであった。ホストとなってこのような催しを行うことの難しさを痛感した。

その後平成20年(2008年)6月には、やはり加藤室長が発案し中塚数夫事務長の強い後押しがあって、非常時の仮眠室となっている和室を使った歓迎茶会を催した。仕事の合間に一休み…。客員の方に日本文化を楽しんでいただ

うとまずは三人で茶室作りに取り組んだ。大広間にガムテープを張って茶室らしい一画を作り、長机の脚を折り畳んで床の間を作り花を活けると静寂な小空間が生まれた。茶道具を車で家から運び込み水屋に見立てた流し場に据え付け、菓子と「One opportunity, One encounter」(一期一会)と書いたステッカーを貼った楊枝を用意し、お運び役の女性職員と作法を練習し、と当日までの準備は大わらわ



図 5. 科学院サマースクール講義光景

だったが普段とは異質の仕事を皆で楽しんだ。道具の都合から招待者は客員とそのホスト教員達、所長、事務長などの20余名に限られてしまったが、四川大地震の直後に黙祷を捧げて始めたこの茶会は外国人だけでなく日本人にもたいそう喜んでいただけた。正座をしてほとんど無言で進行する伝統文化のパフォーマンスは、言語の壁を超えて交流の場としては格好のものようだった。再度の開催を望まれたが、準備が容易ではないこともあって一度だけの催しだった。

2. 英会話ランチ

国際室が立ちあがり東京大学が国際化にさらに力を注ぎ始めた頃、中塚事務長は経費を捻出して英語教師を雇い、希望者を対象とした英会話教室を始められた。週に一度、それも2カ月という短い期間であったが、日本人教師が来所して熱心な技術職員や事務部職員が勤務時間外に学んだ。

二人の若い事務職員から、どうにか継続して英語を学びたいという相談を受けたのは経費が尽き教室が終了することになった時である。そこで、私の置かれている立場や恵まれた室環境を生かせないかと考えた。地震研では交流の場が少なく残念である、とは多くの客員が口にされることである。そうして、職員と客員双方の希望を叶えることができたらと願い、この職員達に世話人になっていただいて始めたのが週一度の“Eikaiwa lunch”である。

最初は、4~5人が昼休みにお弁当持参で集まりテーマや教材を工夫しながら英語で会話するという細々としたものだった。しかしそのうちに、“Eikaiwa lunch”は思ってもいない展開となった。まず、この場が見知らぬ異国の地で暮らす客員の同伴家族にとって格好の寄り所となったことである。とくに初めての日本で日中独りになることの多い夫人方は、毎週楽しみに出かけてきては身近な生活上のことから日本の文化に至るまでさまざまな質問を持ち込ん

だ。これらの問いに日本人グループがいつも迅速に答えられるとは限らなかったが自然とランチの話題も広がり、分からないことは調べるなどして彼らの日本での生活を手助けた。45分の休憩時間はあっという間に過ぎたが、とくに印象に残ったことは私達自身の母国日本の歴史や文化に対する知識がたいそう貧弱だったことである。語学力以前の問題であり、自国を顧みる良い機会になった。

このランチは、地震研スタッフ相互のコミュニケーションを図ることにもつながった。職種ごとに縦割り化された作業環境の中で、限られた人と顔を合わせるだけで一日を終える人が多かった。日によって参加人数も顔ぶれもまちまちだが、さまざまな立場の人が顔を合わせるこの場は互いを知る上でも貴重な機会だった。それは日常の仕事を行う上においても良い効果となって現れた。始めは外国人との接し方に不慣れだったスタッフ達も次第に積極的になり、時に客員の歓迎会や送別会を世話人が中心となって催す。図6は、夏のかき氷パーティの様子である。

このEikaiwa lunchグループは、その活動の所への貢献が認められ、2009年に「第2回地震研究所所長賞」を受賞した。また、平成22年(2010年)10月に佐々木毅総長が東大構想説明の一環として地震研を訪問された際に平田直所長が地震研国際化活動の積極的な取り組みの一例として紹介されるなど、思いもかけない光栄に浴した。小さなグループの嬉しい驚きであった。本国に戻ってからもおメールで話題を提供し続けてくださるアメリカの夫人や、特任研究員として地震研に働き講師のように私達を補助してくださるインド人女性の存在などはメンバーにとって大きな励みである。また、地震研を再訪し、このランチを懐かしんで「まだ、やっていますか？」とひょっこり顔を出される研究者もおられるが、皆の明るい大きな笑い声は職場にある力をもたらしてくれるように感じる。

招聘事業の舞台裏

以上において、地震研国際室発足時から現在までの6年余にわたる活動を私自身の業務体験を基に紹介し、振り返ってきた。新しい部署のスタートにあたって付きものの試行錯誤を経て、結果的には国際室の主な事業となった「招聘事業」に関しては限られた予算規模、人員体制の中でそれなりの成果をあげられたのではないかと考えている。ただその過程は、個人の努力でどうにか解決できるhumanな問題とそれだけではどうにもならないadministrativeな問題とを抱え込んだ苦心の日々の連続であった。

前述したように、東京大学は地震研国際室設立と同年の平成17年(2005年)4月に文部科学省の大学国際戦略本部強化事業の採択を受けて「国際連携本部」を設立した。そして平成22年(2010年)4月1日には、全学的な国際関係の業務・サービスを行う部門を統合・再編成して「東京大

表 7. 「短期小規模事業」採択事業（2009 年度-2010 年度）

年度	申請者	申請内容とテーマ	執行時期
平成21年度(2009年度)	三宅弘恵・瀬戸一紀	イタリア・ラクイア地震に関する国際共同研究のため、本所研究者(瀬戸一紀教授)の海外派遣	2009年9月27日～10月5日
	市原美恵・金子隆之	無人ヘリコプターによる火山観測手法の開発のため、Sharon Kedar氏(Jet Propulsion Laboratory, NASA, USA)を招聘、情報交換	2009年10月3日～10月10日
	大湊隆雄・市原美恵	浅間火山空振観測のため、Pasquale Poggie 氏、Giorgio Lacanna 氏(Firenze University, Italy)を招聘	2009年5月30日～6月14日
	中谷正生	地震活動のモニタリングと危険度評価手法を日本に紹介、国際シンポジウム・金曜セミナーで講演のため、Gerhard van Aswegen氏とGerenger van Aswegen氏(南アフリカISS社、South Africa)を招聘	2009年5月19日～5月28日
	波多野恭弘	IPGP研究者と「断層の摩擦法則」について今後の共同研究の方向性議論のため、渡仏	2010年1月2日～1月14日
平成22年度(2010年度)	山科健一郎	日伊の地震活動の特徴について議論、地震活動を予測する手法の進展を図るため、Giuseppe Falcone氏(Research Associate, INGV, Italy)を招聘	2010年2月5日～2月19日
	小屋口剛博	火山噴煙モデルについて議論、および共同研究長期的計画立案の意見・情報交換のため、Marius Ungarish氏(Technion, Israel)を招聘	2010年7月28日～8月10日
	平田直	「地震活動評価に基づく地震発生予測」プロジェクト打ち合わせ、予測ソフトウェアの開発・更新およびスイス地震局との国際協力関係増強のため、Fabian Euchner氏(スイス地震局, Switzerland)を招聘	2010年10月25日～11月9日
	森田裕一・飯高隆	内陸地震の研究における日本と中国の共同推進ワークショップ開催のため、Gao Yuan 氏(中国地震局地震予測研究所, China)他8名を招聘	2010年11月24日～11月25日

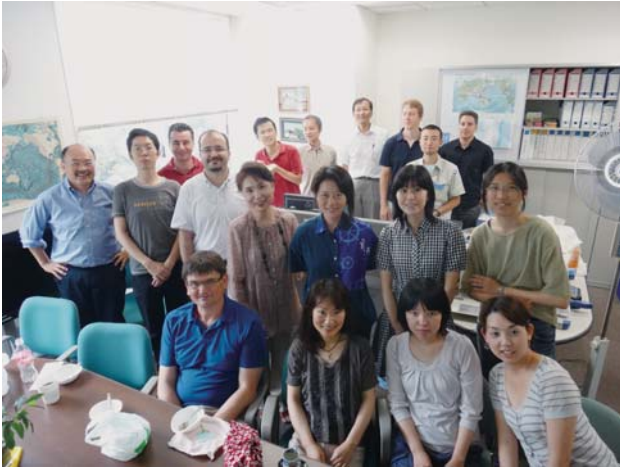


図 6. 英会話ランチグループ・パーティー

学国際本部」と発展させ、国際化事業を強く推進してきた。このような時期の符合に思いを馳せると、東大とその一部局である地震研との間にたとえ構想の内容や事業に大きな規模の相違はあるとしても「国際化」への歩みの歴史は重なり、この間経験したさまざまなできごとが浮かんでくる。国際化を唱え外国人研究者を多く迎え入れようとしても、発足当時、その受け皿は何も整っていないのが実状であった。

自然災害やアジア各国での防災教育の分野において積極的に協力した加藤室長の許での国際室と東大本部との交流は緊密で、良い協力関係にあった。本部は、全学の国際化を推進するにあたって諸々を整備するため各部局担当者からの提言を求めてきたが、これに対しても国際室は積極的に応じてきた。実務者として日々直接外国人研究者や家族と向き合うことになる私も、小さなことでは室長や事務部に相談し、部局単位で叶わない大きなことでは室長や事務部を通して東大に改善を求めてきた。双方の創設から丸6年が経ち、今ではかなりのことが整備され、体制が整えられてきているように思える。とくに、平成19年（2007年）の柏キャンパスの数物連携宇宙研究機構の創設は東大国際化にとってかなりの推進力となったのではないかと推察する。これは、文部科学省が目指す世界トップレベル国際研究拠点の一つとして立ち上げられたもので、当然のことながらその資金的人的規模の大きさと学内でも群を抜く。昨平成22年（2010年）には柏インターナショナルオフィスが設立され、以来、留学生や外国人研究者の来日手続きに関わる相談や生活情報提供、地域連携窓口などのサービスを提供して安心で快適なキャンパス生活を送るための様々な支援が行われている。国際室客員に日本の保険や共済などの制度についての説明が必要な時には、私もこの頃のこのウェブサイトを頼りにすることが多い。しかし、国際化の体制はまだまだ全体にまでは及んでおらず、各部局の現

場担当者の努力に委ねられているというのが私の実感である。

そこで最後に、招聘事務作業の過程において困ったこと、首をかしげたことなど、いわば招聘の舞台裏についてお話してみたい。些末なことと思われるむきもあるかもしれないが、同じように外国人招聘という仕事に携わり日々外国人研究者と接する立場におられる方々には共感される部分がある。これからの何らかのお役に立てば幸いである。

1. 宿舎の確保

妻と幼子二人を同伴して来日したアメリカ人研究者を紹介してある良心的な民間賃貸業者を知るまで、招聘事務の作業において思いがけず多くの時間を費やすことになったのが客員用宿舎の確保である。

国際室では、一度東大の宿舎に応募し落選した客員にのみ月々かかる住宅費用の一部（定額）を補助して民間の宿舎の利用を認めているのだが、こと夫婦用、家族用部屋に関する限りは東大宿舎に入居できないケースがほとんどであった。国際室発足後4年を経過した平成21年（2009年）に東大創立130周年事業の一環として農学部構内にレストランとホテルをあわせ持つ「向ヶ岡ファカルティハウス」が、平成22年（2010年）に外国人研究者用宿舎として追分に「追分ロッジ」が建設されるまで、国際室が頼みとした宿舎は通勤の至便さから「白金台ロッジ」と「山上会館」その「竜岡門別館」であった。その中で、家族部屋を持つのは白金台ロッジのみ、しかも室数は11室である。これを全学が共有する。応募が入居6か月前から可能で申請は月に一度のこのシステムにタイミング良く乗れる国際室客員は少なく、次第に増える家族同伴の客員の住まいをどうやって確保するかが現実的には最優先の課題であった。

そこで民間の物件を探すことになるが、賃貸料、室の広さ、通勤の便利さ、住環境の良さ、といった諸条件に叶う物件は東京においてそう容易に見つかるものではない。毎日部屋探しに終始し、一時はまるで国際室が不動産業を営んでいるかのようであった。東京における高額の家賃は、過去において日本の地方大学に滞在した経験のある客員や日本ほどに豊かではない国からの来訪者にとってなお理解し難いようで、納得いただくのに苦心した。また、住まいへの関心はパートナーや幼い子供を同伴する客員にとくに高く、招聘の採択通知を送付すると最初に問い合わせを受けるのが宿舎に関してである。きりのない住まい探しに疲れてほどほどの所を思いはしても、自分が相手の立場に立った場合を考えるとないがしろにはできなかった。

単身部屋や夫婦用部屋についても、この二つの施設が近くのできるまでの苦心は同様である。さらに、東大施設の利用勝手の悪さが拍車をかけた。室の間取りや広さ、設備の利用法、賃料などの情報も、最近になってようやく東大

HP に英語版ウェブサイトが作られたものの、それまでは FAX で資料を取り寄せそれをスキャナーで取り込んで客員へのメールに添付して、という有様だった。ある宿舎に至っては、空き室状況の確認に出向き、利用申請書を作成しては出向き、チェックインの 2 週間前にまた一時金の納入に出向きと非常に非効率的な利用システムであった。キャンセル手続きも電話口では叶わず、室の鍵の受け渡しとなると週末休業となる東大ではさらに厄介であった。少々の室料の差であるなら、とホテルや民間宿舎の利用に形勢が傾いていったのは当然のことである。

宿舎については、用地の確保や建設に高額のコストがかかることを考えれば容易なことではないが、古い建物のリサイクルやリフォーム、利用システムの簡便化など手短かに講じられる対策もあるのではないかと考える。また、最新の設備を施した立派な室を少し作るよりも、平均的なしつらえのゲストルームを多く用意したり民間業者との提携のもとである室数を借り上げたりするのが、東大を訪れる外国人にとっては手助けになると思う。古い日本風家屋をあえて望まれる方もいることであるし、民間利用の多くの場合に直面する「保証人」の問題もこれによって解決されよう。

2. ビザ申請手続き

部局からの強い要望があったのだろう、平成 18 年（2006 年）秋に東大構内においてビザ取得手続きを代行するためビザ・コンサルティング・サービス（在留資格関連業務）が提供されるまで、客員の本国でのビザ申請手続きに有用な法務省発行の「在留資格」の申請には人事係員が品川の入国管理局まで出向くというほぼ一日がかりの仕事だった。今では、ある定められた日に本郷、駒場、柏の各キャンパスに窓口が設けられ、発行された証明書は郵送で申請代行者の許に送られてくる。手続きに必要な費用も、本学教職員が「教授」、「留学」等の在留資格認定証明書を申請する場合に限り東大本部が負担する。必要な書類を揃え預けてくれば、以後の手続きは支障なく進めてくれる。

ビザ申請は招聘にとって欠かせない、そして大変厄介な手続きである。取得したい資格により国により手続きが異なる上に、それは時の外交情勢によって変わりもする。国際室は、国際室客員だけでなく所の各教員が受け入れる外国人についても求めに応じノウハウを提供したり実際の手続きを行ってきたが、しかしやはりその都度外務省の HP を覗き、このビザ・コンサルティング・サービスを請け負う業者に電話で確認することが多く、作業を進める上で大きな手助けになっている。

外国人が来日する場合に限っているこのビザ申請手続きサービスであるが、日本人が外国に行く場合の申請にも拡張されたらさらに多くの教員、学生が恩恵を蒙ることであろう。

3. 英語の文書

諸文書や職名表記について、東大では徐々に英文化を図ってきたが、ようやく形となったのはここ一、二年のことである。英語化したい文書を挙げて欲しいとの本部からの連絡で各部局が思いつくものを要望した。今ではそれは国際本部ウェブサイトに「外国語による各種資料」として掲載され必要な時に閲覧できるようになっている。だが、それとて東京大学の概要や規則といったもので、必ずしも現場の事務担当者や外国人研究者が欲するものばかりではない。サイトをそのまま外国人研究者に紹介し、参照していただけるような実質的かつ身近な情報が掲載されていたらどれほど便利だろう。招聘事業が始まって 1 年、ちょうど事務部に着任した国際経験豊かな専門職員の協力を得て、国際室は住居や保険、日本で生活などについてまとめた数頁の英文パンフ“Life in Japan and ERI for Foreign Visitors”を作成した。今でも、採択された客員には最初にこのパンフを送り、参考にさせていただいている。

所内に目を転じてみると、地震研では「入所届」「指紋登録届」「図書館利用申請」「退所届」など入退所時に必要な書面は全て日本語でのみ用意されていた。これまでも外国人の在所数は多かったと思われるが、実際に関わってみるとさらに、形骸化した書式も多いことに気付いた。その係での手続きに必ずしも必要としないデータや重複するデータが含まれていたし、互いのファイルが連動されていず、氏名や所属先など同じことを何度も入力しなければならなかった。そこで、これらの書類の見直しと英語併記について事務部に相談した。中塚事務長の指導の許で、これはやがて事務部内で要する各文書や手続き全体の見直しにつながり、最終的には事務部ウェブサイトの再構築が行われた。

余談であるが、英訳とは逆の日本語訳文書の作成に関してもかかる手数も侮れない。客員のビザ申請に有効な日本法務局発行「在留資格証明書」の申請、東大での雇用手続きに必要な人事書類には全て日本語訳を付さなければならない。それは伴侶や子供を同行する時にさらに煩雑となり、結婚証明書、出生証明書まで原本を取り寄せ、訳を添付する。姓名や地名などの固有名詞はカタカナで表記するが、あまり馴染みのないトルコ語の書類を前にした時にはプロの通訳を頼み、人事係員と私が耳を澄ませて発音を表記したことがあった。

4. 「採用」について

3 カ月以上に渡り地震研に滞在する外国人客員を東大の雇用者扱いとし、「客員教授」などの名誉称号を付与することにしたのは国際室内での議論による。だが平成 21 年（2009 年）には東大に新たな就業規則が設けられ、1 カ月以上滞在する外国人研究者は全て職員として採用できるようになった。と同時に、給与額の決定も部局の裁量に委ねら

れ、1万円単位で自由に外国人研究者の給与を決定できることになった。これは携わる関係者にとっては大きな負担であった。給与という人事上重大なことを決めるほどの豊富な知識と判断の基準を、一部局としては持ち合わせないのが普通と思えるからである。人事係とも相談の結果、国際室としてはこれまで通りに3カ月以上の滞在者を採用扱い、給与についてもこれまで通りの体系を採用して進めることとした。採用には前述のような多くの事務処理が発生し、それをこなすだけの人的余裕がないことも問題であった。さらに、大学を超える以下のような問題点もあるのではないかと考える。

まず、「文部科学省共済組合」への加入である。すでに本国で年金制度に加入している場合などを除き、ほぼ全ての人が加入することになる。医療保険として還付される「短期保険」は同伴家族を含め多くの方が恩恵を蒙るとしても、将来に年金として還元され月々の給与から多額を引き落とされる「長期保険」については納得の得られないことが多い。一部条件を満たした人が「組合脱退一時金」を請求することはあるものの、やがて日本に永住する人以外には長期保険は掛け捨ての保険である。社会保険庁からは型通りに「基礎年金番号通知書」が本人宛に郵送されてくる。だが、日本語文書の理解もさることながら、行政手続きに長い時間がかかるためすでに帰国後に地震研に届くケースが多く、個人情報的重要書類ゆえにこの扱いには苦慮した。

さらにお話が大きくなって、国レベルのこととして疑問を抱いたことに子供手当がある。この郵便物は何？、と客員が厚生省からの通知を持って現れた時には驚いた。ほんの数カ月の日本滞在者に子供手当が配られている。法の運用について考えさせられたことであった。「租税条約」もある。日本と国交が樹立されている世界中のほとんどの国との間で日本は二国間租税条約を結び、日本と母国で二重に課税されるのを防ぐ措置をとっている。気の毒に思えたのは台湾から迎えた客員であった。給与や旅費が20%減額されて支給される。さらにトルコについてもある条件下ではこの規則が適用されることが分かり、滞り途中で賃料の安い室へ移るか同伴家族を本国へ帰すかの選択を迫られた客員がいた。この仕事に関わらなければ知ることもない国際政治の現実であった。

5. 病気時の対応

長い方では6~9カ月となる日本滞在中には、自身だけでなく家族が風邪を引いたり歯が痛くなったりけがをしたりと、予期しないことが起こるものである。お医者さまも日本人の付き添いを求める場合が多く、私もある時期毎週のように客員とその家族に同伴して病院通いをした。具合が悪いとの連絡を受け、夜遅くまでインターネットで文京区内の救急病院へ電話をかけまくったこともある。また、

宿舎のオーナーが深夜自家用車で東大病院へ運び込んで下さったこともある。幸いなことにこれまで重大な結果に至ったケースはないが、型通りの「業務」と言う言葉では括れない部分もあるのが国際室の仕事である。遠慮も働いてか、客員はこのような場合に研究者である受入教員へは連絡しない。何事か困ったことがあれば、まず一番身近な者に助けを求めてくる。会議などではあまり配ることのない名刺も客員には必ず渡して、不意のできごとにもいつでも対応できるよう備えた。

本郷キャンパスには、東大職員や学生の健康管理をサポートする「保健センター」があり、診療も行っている。小さなセンターだけに待ち時間も少なく、ちょっとした病気や症状を診てもらうにもとても便利な医療施設である。しかしここは客員の同伴家族の診察までは行わない。健康維持に関わるこのような部分こそ門戸を開いてあげてはどうだろう。大学にとって相当の負担になってしまうのだろうか。

終わりに一感謝を込めて

来日までのやりとりと準備に半年、支障なく来日して一安心、そして無事帰国の連絡を受け帰国の搭乗券半券を受け取ってようやく全安心。だがそれでも客員とのメール交信は終わらない。一度地震研を訪問しご縁ができると、その後も何かと別の用ができるものである。そしてこのようなお付き合いの人が増えることは地震研にとって歓迎すべき、とても喜ばしいことであると私は考えてきた。この3月の大震災では、多くの方達から早々にお見舞いのメールが届いて驚いた。東北の多くの被災者と同じように私も、この不幸な出来事にあって人の心の有難さを深く受け止めた一人であった。初対面の時に、At last! (ようやく会えた!) という言葉を口にされる客員が多いが、長い期間に及ぶメールの交換はすでに互いの親しみを深めているのかもしれない。

招聘事業は、国際室の事業活動の大きな部分であるとしてもすべてではない。前述したような多くの活動のために常にさまざまなことが討議され、内外の多くの人が出入りする。まさに国際室は交流の場である。一時期は、地震予知について地震研と交流を求める外国の大学関係者や行政関係者の訪問が相次いだ。東大における留学生教育について相談にみえる学内者もおられる。さまざまな関連国際学会の活動や運営に地震研がどう関わるかなどの戦略的議論もここで繰り広げられる。また、世界のどこかで大きな地震が起こればここは撮影スタジオと化し、マスコミの方が出入りする。海外メディアから国際電話もかかってくる。さらに、在所中の外国人が困りごとの相談に見えたり、懐かしがって立ち寄ってくださる突然の訪問者も多い。このような状況を考えると、何にでも臨機応変に対応ができ、

時にゆっくりくつろいでいただけるほどの自由な雰囲気も必要なのが国際室かと思う。

国際室の創設に関わり、曲がりなりにも無事に国際室の仕事を全うできたのはひとえに加藤照之室長のおかげである。苦楽を共に、と申しては大変失礼だろうか。優れた行政手腕と素早い仕事処理能力で次々と新しい仕事を持ち込まれ、それに私も日々向かうことになった。私がつい目先のことに囚われがちなのに対し、室長は室全体が抱えている案件にたえず神経を行き届かせていた。国際関係のことに関して東大や文部科学省からもたらされる頻繁な調査への対応ひとつをとってみても、ご自身の研究を抱えながらこの役割は相当の負担であったことと思う。

また、室創立の翌年に地震研に着任された中塚数夫事務長にも心から感謝を申し上げる。この方が足繁く国際室に来られ、また事務長室に呼び寄せて現場の私の意見に耳を傾けてくださらなかったら、所内の事務手続き的な事柄に関する限りにおいては現在とはやや異なる成り行きになっていたのではないだろうか。事務部の人事係、研究協力係の代々の係長、係員にもことのほかお世話になった。各専門分野のプロの知識と協力なくしては国際室事業は成り立たなかった。

最後になるが、どうしてもご紹介しておきたい民間の方がいる。極言をお許しいただけるなら、このお二人のビジネスを抜きにした協力なしには私は招聘の仕事を円滑に進めることができなかったかもしれない。協和海外旅行(株)の宮島秀行さんと、(株)ツナシマ建物の加藤静枝さんである。宮島さんには航空券の手配において大変お世話になった。いつも機敏に適切に対応くださり、おかげで変更やキャンセル、時に乗り遅れなどの特殊な事態にも国際室

として最大限の便宜を客員やその家族に提供することができた。不動産業を営みウィークリーマンションを経営する加藤さんは、アメリカ人研究者がインターネットで探し紹介してくださった。それまで都内のあちこちの物件を見て歩いたが、室のしつらえや立地はさることながらケアの面においてここに勝る所はなく、以来ずっとお世話になっている。柏キャンパスの数物連携宇宙研究機構の発足の頃、やはり宿探しに苦勞する担当者に情報提供を求められて紹介したほどである。客員が具合が悪いと言っては病院に運び、夜中に子供が熱を出したと聞いては果物を差し入れする。流暢な英語を駆使し契約まで直接客員と交信するこの有能でボランティア的な方に出会わなかったら、さぞ私は混乱の極みにおかれたことと思う。産学連携時代の今だから許される言い方かもしれないが、このお二人は国際室を支える影のスタッフであった。

毎日9時45分に始めていた朝のミーティングも、室長の交代、私の退職とで後数カ月で終わる。今は、この10月にパリとリヨンにおいて開催の「東大フォーラム」や12月にサンフランシスコでのAGUに合わせて開催を予定している「国際室同窓会パーティ (ERI Alumni Party)」の準備に取り組んでいる。東大フォーラムへは地震研から研究者、学生、事務方合わせて26名と全15部局のうち最多数が参加、東大総長や国、市の行政関係者など出席のイベントも多くとくにリヨンは市をあげての歓迎行事となる模様である。国際室は留学生フェアや各会場において地震研や国際室の紹介にあたる。約60名の参加者が見込まれる第2回国際室同窓会については、良い雰囲気を作り、多くの関係者にawayでの再会のひとときを楽しんでいただきたい。このような積み重ねが地震研の将来につながれば



図 7. 2011 年 10 月 17 日, Paris/College de France での「東大フォーラム」開会式において、地震研参加者の記念撮影。学内でもっとも多く参加員数となった。

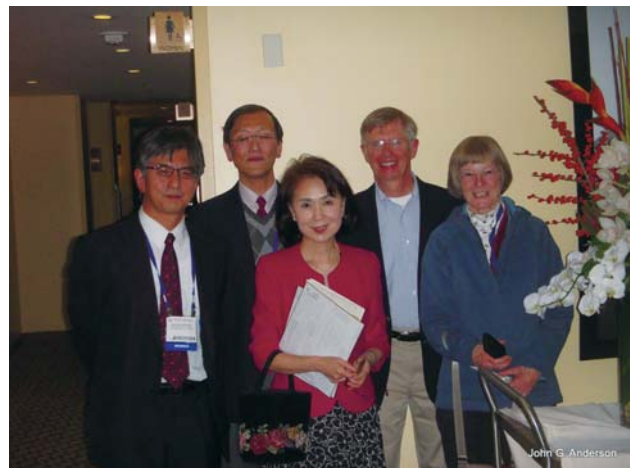


図 8. 2011 年 12 月 6 日, Hotel Nikko San Francisco において開催された「国際室同窓会」での一コマ。サプライズ・プレゼントの感謝の寄せ書き色紙をいただいて、現室長の佐竹健治教授、前室長の加藤照之教授、Nevada University の Prof. Anderson 夫妻と共に。

と思っている。

遠い国からのお客さまを含めて、これまでお世話になり共に楽しませていただいた多くの方々に心から感謝申し上げます。国際室についてのこの小記録が今後のひとつの参考になれば幸いです。数年の後に、発展した地震研国際室を見るのをとてもたのしみにしています。

謝 辞：加藤照之教授には原稿をお読みいただき、内容

について事実を確認いただきました。また、査読に当たられた岩崎貴哉教授、三浦弥生助教のコメントは文章の改善に役立ちました。厚くお礼を申し上げます。

追 記：本稿執筆の間準備していた「東大フォーラム」と「国際室同窓会」が成功の内に無事終了しました。ご報告いたします（図7、図8）。